愛光NEWS
2025年4月

２０２５（令和７）年５月３１日発行
（編集）愛光本部
（TEL）０４３－４８４－６３９１
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

【はるの風】
4月1日、令和7年度の辞令交付式が行われ、新任職員 8 名、異動職員 4 名、雇用変更の職員 4 名に辞令が交付されました。
新任職員たちは、4 日間の新任職員研修を終え、配属先の現場での日々が始まりました。
現場に、新しい風を吹き込まれていきます。

□事業経過など（2025.4.1～）

1	火	辞令交付式/新任職員研修初日
2	水	地域食堂委員会/新任職員研修 2 日目
3	木	新任職員研修 3 日目
4	金	新任職員研修 4 日目
8	火	業務執行会議/防災委員会
10	木	広報委員会
15	火	感染症対策･衛生委員会
16	水	地域食堂ともいき/栄養改善委員会
18	金	ボランティア委員会
21	月	佐倉圏域事業部実績会議
22	火	後援会運営委員会/コンプライアンス委員会
23	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務 PT
24	木	高齢者福祉事業部実績会議
25	金	本部実績会議

■月報から

□　新年度　　（ルミエール）

『支え合い、共に輝く』　2025年度ルミエールのスローガンである。シンプルな言葉であるが、たくさんの想いが込められている。利用者支援において施設と施設職員だけで完結することは不可能であり、多くの人たちの支えがあってはじめて利用者の笑顔につながっている。その支えの輪には、利用者のご家族、後見人、多職種の専門職である栄養士や看護師、さらに行政や相談支援事業所など、本当に多くの人々が関わり、利用者と私たち施設を支えてくれている。意思決定支援や地域移行といった取り組みを通じて、利用者の気持ちを大切にし、これからの人生が笑顔で輝くために何ができるかを考える機会でもある。もちろん、利用者の生活が輝くものであってほしいが、それだけでは不十分である、スローガンの通り「共に輝く」ことが大切であり、その中には私たち職員も含まれている。輝くとはどのような状態であるのか。この１年間でたくさんの輝きが見られるようスタートしていきたい。

（ルミエール課長　原　宏之）

□ 4 月といえば…　（めいわ）

4 月は出会いの季節。めいわには新たに 3 名の新任職員が加わり、利用者の皆さんにとっては、これから共に過ごす職員、もしかしたら、担当になるかもしれない職員がどんな人なのか興味津々である。4 月中は、各フロアで歓迎会を行い、皆で楽しいひと時を過ごした。月末に行ったあおばの会で改めて 3 名の新任職員を紹介し、そのまま質問タイムに。「好きな食べ物は何ですか？」と、利用者からのド定番の質問に答える 3 名。そのとき答えた言葉、口調やしぐさなどから、あなたがどんな人物なのか、案外利用者には見抜かれているのかも･･･。

（めいわ課長　中田　憲一郎）

□ 歓迎会　　（根郷通所センター）

新　しく入った利用者 3 名の歓迎会を実施した。山王公園で花見の予定であったが、天候が悪かったため通所内と通所裏の芝生で実施することとなった。事前実習で顔を知っていたこともあり、自己紹介と毎年恒例の質問タイムを通じて、緊張も和らぎ、打ち解け合うことができた。

（根郷通所センター所長　菊池　暁生）

□ 新型コロナウイルスクラスターが発生　　（リホープ）

3 月中旬から発生した新型コロナウイルス感染症だが、感染が拡大し、終息するまで約 1 ヵ月を要した。感染が広がった要因は多々あり、職員会議で反省会を行った。5 人以上の陽性者が発生した場合には、1 階は談話室ではなく各居室に配膳し、居室で食事をしてもらうこととした。2 階は、グループに分けて食事時間をずらし、密にならない形で食事を行うこととした。防護服の脱ぐ場所が外となっていたため、施設内に脱衣場所を設けることとした。職員間で感染が広がったことから、事務所内の消毒箇所を増やし、それを標準とすることとした。

（リホープ副施設長　麻生　知明）

□ 令和 7 年度スタート　　（山王の家）

４月を迎えたが、いつも通りのスタートとはならなかった。

3 月末から生活介護事業所でコロナウイルスの罹患が発生し 2 週間以上 3 名の利用者が登所出

来なくなった。最初の何日かは、ゆっくり出来る嬉しさと、罹患していないかのドキドキ感も見られた。日を重ねるうちに時間を持て余すようになり、何かやれる事はないか考えるも、慌ただしく時間が過ぎてしまう日々であった。更に日を重ねると、今度は登所したくない気持ちが芽生えてくる。事業所の感染状況の情報に当人たちが振り回されている感が強く、こうした状況の中で、毎日規則正しく生活する事の大切さを改めて実感する。かろうじて花見には行くことができ、季節を感じる事が出来た。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□ 2025 年度スローガン　　（ワークショップかぶらぎ）

2025 年度のかぶらぎのスローガンは「晴れ晴れと輝く笑顔と慈愛のこころ」に決定した。発案者によると「かぶ」の花の花言葉に由来するとのこと。かぶらぎに行けば気分が晴れ、そこは笑顔がある場所であり、良い日も悪い日もある日々を互いに慈しむ関係でいられるように。このように捉え、一年間取り組みたい。

（ワークショップかぶらぎ主任　宮部　和樹）

□ 個別支援計画の取り組み　（ジョーの家）

Ｈさんの昨年度の目標は「台所の環境整備をおこない、居室で土日は調理をすることで、調理を楽しみ、出来ることを増やしたい」であった。調理器具を揃えたものの、３月のモニタリング時、1 人では億劫な様子を訴えた。そこで今年から職員と一緒に調理を始めることになった。今月のメニューは、本人の好きなラーメンと野菜炒めであった。調理に関しても、簡単におこなえる具材を説明し、近隣スーパーへ買い出しに行った。これまでの生活経験もあり、調理自体は問題なく行えた。以前は、自室の掃除を職員と一緒に行うことで、習慣化できたという成功体験があり、今回の調理の取り組みにおいても、職員との関わりを通して、調理が定期的な活動となり、生活の楽しみや自信に繋がっていくように支援をしたい。一人で行えることを増やすことは、自立した生活を送る上で非常に重要であり、生活の質を高めることにも繋がる。今後も入居者の変化や成長を、職員が関わりを深めることで、引き続き見守っていきたい。

（ジョーの家　髙橋　健）

□ 今年度の目標は…　　（よもぎの園）

昨年度は作業売り上げを大きく伸ばすことができた。これにより、平均工賃も 2 万円台がほぼ確実となり、4 月からの基本報酬はこれまでの 1 万 5 千円～2 万円未満から、2 万円～2 万 5 千円未満の区分がとれるようになった。この区分はコロナ前にとれていたものであり、ようやく戻ってこられたことに感慨深い。今年度は、できる限りこの区分を維持できるように取り組んでいきたい。

また、新たに利用者 2 名が加わったことにより、作業室のレイアウトにも手を入れる必要が出てきた。作業の生産性を上げながら、動線もしっかりと確保できる作業場を作るべく、職員間で意見を出し合いながら考えていきたい。同時に、利用者間のトラブルも回避できるような席配置を実現できれば申し分ない。

（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□ 新年度スタート　　（かけはし）

かけはしも開所から 2 年目を迎え、相談員 2 名体制で令和 7 年度がスタートした。
昨年度より組織改編によりアシストが佐倉圏域事業部となり、密な連携をとりながら業務を遂行していたが、1 名体制では事務所も閑散としていた。新年度は引継ぎ業務等に追われながらも 2 名体制となったことで、何事にも二人三脚で取り組むことができるようになり、事務所にも活気や賑わいが見られるようになってきている。

佐倉圏域での事業展開もより意識し、地域との関りを深め、ニーズをより深く理解していける新年度にしていきたい。

（かけはし所長　戸室　輝大）

□ 新たな相談業務の従事者～相談支援員～　（アシスト）

令和 6 年度の制度改正により、相談支援人材の確保対策として、「機能強化型事業所で主任相談支援専門員の指導助言を受ける体制が確保されている場合、常勤専従の社会福祉士・精神保健福祉士を「相談支援員」として配置可。」と示された。

佐倉市では基幹相談支援事業所2か所（アシスト）、委託相談支援事業所3か所（かけはし）のほかに指定特定（計画相談）を実施している事業所は2か所のみ。年々増加するケースに対し、対応できる事業所数は増えておらず、市内に限らず相談支援専門員の業務量は増している。

アシストには主任相談支援専門員がおり、今回の体制が組める。4月からは社会福祉士の資格を所持した職員の配置があり、「相談支援員」が誕生した。年内には相談従事者研修を受講し、「相談支援専門員」となる予定である。この制度を有効活用するためにも、アシスト・かけはし内で主任相談支援専門員の育成が必要となる。様々な経験を経て相談事業の柱となる人材を育成できるように体制を整えたい。

（佐倉圏域事業部長　近藤　美貴）

□ 春の贈り物　３年目　（はちす苑）

地元の方に 『たけのこ』を頂いた。生のたけのこを利用者の方にお見せすると「春のたけのこですね～」と喜ばれた。
軟らかく煮ものにしてお出しすると、「柔らかく美味しいですね」と、嬉しいお返事を頂けた。

昨年、ふきのとうを玄関横の畑に植えたところ１年で大きな『ふき』に成長した。4 月の末に利用者の方と収穫し、すぐに皮をむく作業に入った。
90 歳後半の方は、思い出したかのように慣れた手つきで『ふき』の皮むきを進めていた。
「ふきの葉っぱもアクをとると佃煮になりますよ。」とお話しすると、「楽しみにしています」と声が弾んだ。
利用者の方とケアスタッフとで皮をむき、指先はアクで黒く色が残ってしまったが、作業しながらおしゃべりのひと時を楽しんだ。

（管理栄養士　江口　貴子）

□法人の新任研修にて　～認知症サポーター養成講座～　（南部包括支援センター）

２日、愛光の新任研修にて、毎年恒例の認知症サポーター養成講座を実施した。昨年度から、2024 年 2 月の AIKOH フォーラムにおける講師、若年性認知症当事者である丹野智文氏の講演動画を取り入れている。今回も講演動画を見ていただき、認知症当事者の思いや考え方に触れてもら

った。どんな言葉よりも、当事者からの言葉は説得力があり、胸に刺さるものがあると感じる。
近年、言われるようになった「新しい認知症観」という言葉は、「誰しもがなりうることを前提に、住み慣れた地域で希望を持って生きられる」という考え方であり、国民全体の理解が必要だと言われている。
今回の認知症サポーター養成講座を通じて、新任職員の方はもちろん、中途採用の職員にとっても、認知症の方の支援に限らず、日頃の支援を振り返り、自分の支援のあり方や声掛けなど考える機会となったことを願っている。

（南部地域包括支援センター管理者　森　由美子）

□ サロン・ド・ともいき　　（南部地域福祉センター）

サロン・ド・ともいきは、高齢者の参加（要支援1・2他）を対象としており、音楽体操、脳トレ、ゲームなどを当センターにて毎週金曜日に開催している。現在、約 10 名が職員・ボランティアの送迎により集まっている。本年度も、地域の皆さんの心が微笑むような楽しいふれあいを企画していきたい。
活動場所は 6 月より A 棟が休所となるため、B 棟の和室と研修室にて実施予定である。
現在、6 月に向けて、「サロン・ド・ともいき」の活動場所の確保をはじめ、各教室や同好会の活動場所の変更に対応する準備に日々取り組んでいるところである。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□ 新年度を迎えて　　（佐倉市南部児童センター）

2025 年 4 月の利用者数は、前年同月と比較して、乳幼児親子の利用は概ね横ばいであった。一方で、小中学生の利用は約 1.6 倍に増加しており、子どもたちが日々楽しみに来館している様子から、当施設が地域における「居場所」として認知されつつあることがうかがえる。
これは大変喜ばしいことであるが、利用者の増加に伴い、喧嘩や軽微な怪我といったトラブルの発生も見受けられるようになった。こうした状況を受け、本年度より職員数を増員し、施設内外における見守り体制を強化しながら、慎重に事業を進めているところである。
しかしながら、子どもたちの活動範囲は施設の外にも広がりつつある。駐車場や駐輪場での鬼ごっこ、ベランダでの危険行為など、職員の目が届きにくい場所での行動も確認されている。
今後は、危険箇所への注意喚起となる掲示の設置や、子どもたちへの安全ルールの継続的な周知を行っていく。また、職員を対象に、児童の行動理解および対応力の向上を目的とした研修の機会を拡充していきたいと考える。さらに、地域や学校等と連携を図りながら、すべての子どもたちが安心して過ごせる「居場所」となるよう、引き続き改善と工夫に努めていきたい。

（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□2年生の努力と職員の反省　　（学童保育所）

今年度は1年生36名を迎え、16名の2年生は初日からお世話をする気満々であった。「お名前教えて！」と声をかけ、テープにイラストと名前を記入して胸に貼ってあげる姿や、保護者となかなか別れられず、泣きながら入室した児童と手をつなぎ、「私も最初はドキドキしたけど大丈夫だったよ」などと話しかける姿が見られ、先輩として優しくしようとする気持ちが伝わるスタートであった。1年生も2年生が大好きになり、先に学校が始まった2年生が帰ってくるまでに手紙を書いて待つ児童が現れるほど、仲良くなった。
そんな入学式の日、1年生の利用者はおらず、2年生のみの利用となった。すると「あーなんか今日ほっとするな…。」「1年生がいないからかな？」などという声がちらほら…。話を聞いてみると、泣

いている子や「遊ぼう！」と誘われると気になって、思うような遊びができなかったとのこと。確かに、１年生が泣いていると「どうしたの？」と声をかけ、遊びを中断して頭をなでたり隣に座ったりする姿がよく見られ、２年生が頑張りすぎていたことに気が付かず、反省をした。４月の後半には、１年生も学童生活に慣れ、泣いている子も少なくなり、２年生も自分たちのやりたい遊びを思い切り楽しむ姿が見られ安心している。２年生には感謝しかない。

（学童保育所主任　平野　美幸）